

特定非営利活動法人 埼玉環境カウンセラー協会

Saitama Environmental Counselors Association (SECA)

協会だより 第54号



やまねのセカちゃん

〒330-0055

さいたま市浦和区東高砂町 11-1 ヲムレ 9F さいたま市市民活動サポートセンター

メール：seca.kankyo@gmail.com ホームページ：<http://www.saieca.com/>

発行日：2026年3月16日

発行人：会長 中村 章

本号のラインアップ

会長挨拶	1
第40回環境保全講習会の開催	2
令和7年度環境研修会	6
さいたま環境フェア2025	9
楽しかった富士見ふるさと祭り	10
情報交差点・編集後記	11

会長挨拶

中村 章

令和7年度の当会の事業や運営につきましては、県民の皆様並びに会員の方々のご理解、ご協力により無事に推進が出来ました事に厚くお礼を申し上げます。

今年度は新しい理事の誕生や監事の交替もあり、課題となっております新会員の加入もありました。地方自治体への環境審議会委員等の推薦も例年どおり積極的に行っていました。

事業としては地域イベントである「くまがやエコライフフェア」「さいたま環境フェア」「富士見ふるさと祭り」に体験型プログラムの新企画で参加し、予想以上に好評を博しました。第40回環境保全講習会は「食のサーキュラーエコノミー～食品ロスの削減を中心に～」と題して開催し、環境研修会では气象台など熊谷市周辺施設の視察を行いました。

他団体との連携では、全国環境カウンセラー連合会主催の情報交換会に参加するとともに、次年度に向けてNPO 法人富士見市民大学への講師派遣などの調整も進めました。今後も他団体との連携を進めていきたいと思っております。

さて、昨今は環境といっても、地球環境（温暖化、異常気象など）や地域環境が著しく変化してきており、それに関連する法律も改定されるなど、理解や説明が難しい場合もあります。私たち環境カウンセラーはそうした変化に対応するため、様々な情報発信や会員同士の協力も必要になって来ています。県民の皆様への普及啓発活動においては、出来るだけ身近な取組や各自が得意なことで協力していけるような取組をわかりやすく説明していく必要があります。私たちの活動を今後も地道に続けることで、大きな変化は見られなくても、少しでも環境が良い方向に進んでいけばと願う次第です。

最後に会員の方々の活動状況は事務局経由で是非お知らせください。積極的に協会だより等に掲載して皆様の活動の推進に少しでもお役に立てればと考えております。

I 第40回環境保全講習会

令和7年度の第40回目となる環境保全講習会は、令和7年11月8日(土)13:30~16:15にさいたま宇宙劇場の第1・2集会室で開催しました。

今回のテーマは「食のサーキュラーエコノミーの推進 ~食品ロスの削減を中心に~」です。埼玉県にご後援いただくとともに、彩の国環境大学修了生の会及びインカレSDGsプロクプロジェクトにご協賛いただき、開催や発表にご協力いただきました。また、本講習会は例年どおり公益財団法人サイサン環境保全基金の助成により開催したものです。

当会会員の大泉 操さんの司会により開会し、主催者を代表した角江紘一副会長の挨拶からスタートしました。



挨拶する角江副会長



続いて、4人の方から25分ずつ、それぞれの取組についてご発表いただきました。

1 行政の取組

まず、「食品ロスを減らそう！」と題した埼玉県環境部資源循環推進課サーキュラーエコノミー担当 主査 田中 亮さんの発表です。

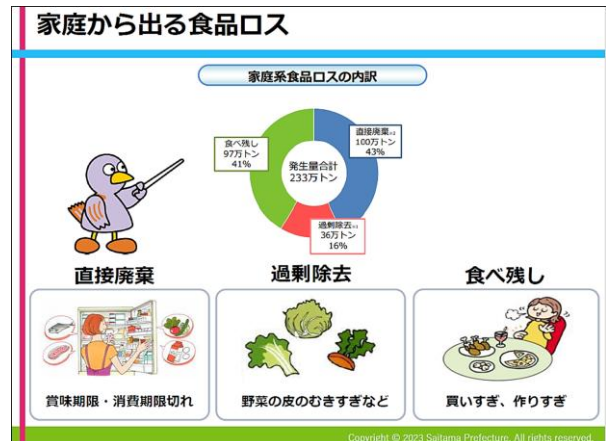
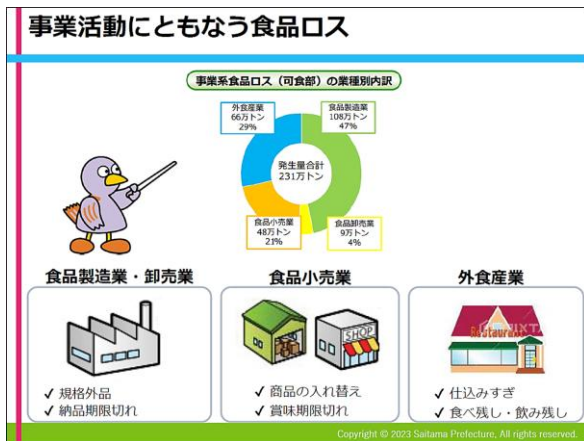
「食品ロスとは、食べられるのに捨てられてしまう食品であり、日本全体で年472万トン(令和4年度推計値)、国民一人当たり1日103グラムも発生しています。これは世界全体の食糧援助量よりも多く、これにより、食べ物自体をムダにし、食費をムダにし、食品の生産・加工・流通で使われる資源・エネルギーをムダし、ごみの運搬や焼却などにより二酸化炭素排出量を増加させます。そして生産者の想いや苦勞を捨てていることとなります。2018年位から対策が本格化し、現在では2000年に比較して減少してきていますが、2030年の目標達成に向けて家庭系も事業系もさらなる削減が必要な状況です。

食品ロスは事業所では、規格外品、1/3ルールなど商習慣による納品・販売期限切れ、仕込み過ぎなどにより、家庭では、賞味期限切れなどによる直接廃棄、調理時の食材の過剰除去、買い過ぎ・作り過ぎなどによる食べ残しにより発生しています。対策としては、事業所では商習慣の見直し、賞味期限の年月表示化、需要に見合った生産・販売などフードチェーン全体での取組が必要です。家庭では、必要な分だけ購入し、調理する、賞味期限を正しく理解する、余っている食品を寄付するフードドライブ運動に参加するなどの取組が必要です。行政では、食品ロス削減のための普及啓発のほか、彩の国エコぐるめ協力店の拡大などに取り組んでいます。食品ロス削減のためには一人ひとりの協力が必要不可欠であり、できることから始めてほしい。」との発表がありました。



発表する田中さん

子育て中の田中さんご自身の体験や実感に基づいたエピソードを混えて、大変、わかりやすいお話でした。



2 環境団体の取組

次は、「食品ロス削減の取り組み&未来を託す子どもたちへ」と題した彩の国環境大学修了生の会 生活循環資源部会 部会長 鈴木純二さんからの発表です。

「生活循環資源部会は、2001年に「ごみ分科会」の名称でスタートし、2009年に現在の名称となり、詰め替え商品などの調査や普及啓発を行ってきました。食品ロスについては、2016年から市民アンケートやフードバンク及び子供食堂の見学会から開始し、2019年から白岡環境センターと協働してフードドライブ活動を5年間で10回行って、子供食堂に寄付しています。2020年からは春日部市SDGsパートナーとして春日部市と協働し、かすかべ



発表する鈴木さん



SDGs フォーラム・ぽぽらフェスティバルに参加し食品ロス対策を含む環境普及啓発を行い、2023年からは春日部市民サポートセンターと共催で「こどもSDGs学習会」を開催しています。本部会では食品ロス対策はもとより、プラスチックごみ対策にも力を入れています。食のサーキュラーエコノミーは食べ物を無駄にしない。誰にでもできるアクションです。「もったいないからありがとうへ！」をスローガンに今後もフードドライブなどの食品ロス削減対策に取り組んでいきたいと思ひます。」との力強い発表がありました。

3 事業者の取組

3番目は、「食のサーキュラーエコノミーを実現するために ～年間 1,200 tの食品ロス削減を達成するマルヤスの取組み～」と題した合同会社ファンタイム 代表の松井ゆきこさんの発表です。松井さんは、環境カウンセラーとしてもご活躍の方です。


「2018年5月に食品ロス削減を目的として、1/3ルールなどの商習慣により一般流通することが難しくなってしまった訳あり商品をメインに扱うスーパー「マルヤ




発表する松井さん

ス」を立ち上げ、現在は都内に4店舗、本県内に3店舗あり、8番目を上尾に出店予定です。開業以来毎年約200トンづつ取扱量が増加し、令和6年度は年間約1,200トンの訳あり食品を再流通することが出来ました。サーキュラーエコノミーは、資源を使い捨てるのではなく、循環させながら利用し続ける経済の仕組みですので、リサイクルよりも再流通を優先することが重要です。それには、「訳あり=品質が悪い」というお客様の意識を改革することが必要であり、マルヤスでは、啓発活動、試食の用意、納得の安価、楽しみながら買い物ができる雰囲気づくりなどに取り組み、売り尽くすことを徹底しています。利益の一部で児童食堂の支援も行っています。」という非常に先駆的な取組の発表がありました。

4. マルヤスの取組み




取扱い商品例（賞味期限切れ食品も積極的に取り扱い）



◆賞味期限切れ迫品

食品流通の業界に根強く残る1/3ルールにより行き場がなくなった食品




オフシーズン品など


さまざまな理由でメーカー様の過剰在庫になってしまった食品

商慣習「3分の1ルール」とは

賞味期限3カ月の場合




出典元：日本経済新聞



◆賞味期限切れ品

今までタブーとされていた賞味期限切れの食品も賞味期限切れであることと賞味期限がいつなのかを明示することで販売



◆ダメージ品

箱つぶれや缶つぶれ、箱の変形などがあるても中身の食品には問題のない食品

4 若者の取組

最後は「高校生による大阪万博・小学校における食に関する体験型ワークショップの実践」と題する次世代SDGsラボ代表 森田ケイコさん(筑波大学付属坂戸高校)とインカレSDGsプロジェクトの一環として支援に当たられている芝浦工業大学名誉教授 中口毅博^{たかひろ}さんの発表です。

「次世代SDGsラボは、SDGsの達成や持続可能なまちづくりに寄与する活動や調査研究を行っている中高生・大学生の団体です。2025年7月～8月に大阪・関西万博会場と久喜市のK小学校(3～6年生合同授業)で行った持続可能な食を考える体験型食育を行いました。自給率・過剰除去野菜に関するクイズ、自給率アップシミュレーションゲーム、農業授業などを行い、振り返りアンケート調査を行いました。「よく理解できた」の回答は、日本の食料受給率が低いことについてはK小51%に対して万博の小学生は70%と差があるが、過剰除去野菜の有効利用については、K小79%、万博80%と拮抗していました。」との発表があり、高校生の実践力に参加者の多くが感心しました。



発表する森田さん



コメントする中口さん

5 質疑応答・フロアディスカッション

全体の締めくくりとして、発表した5名の方々が登壇し、当会副会長の星野がコーディネーターとなり、各発表に対する質疑応答と「食品ロスの削減を進めるためには」をテーマにした参加者と発表者による意見交換を行ないました。

熱心な質疑応答が行われた後、食品ロスを減らすために何が必要かの議論へと進みました。議論は、食品を取り巻く状況の理解促進、そのための食育の重要性へと展開し、最後に高校生の森田さんの「愛ある食卓」という発言に収斂しました。



フロアディスカッションの様子

今回の環境保全講習会の参加者は、24名（成人21名、大学生2名、高校生1名）でした。アンケートは15名の方から回答いただき、回収率は62.5%でした。その概要は次のとおりです。



【非常に参考になった理由等の自由記載事項】

- 行政、市民団体、事業者、学生と非常に幅広い取組を聞くことができた。
- 経済的な側面など幅広い視点から食品ロス問題を見ることができた。
- 「愛ある食卓」という高校生の意見が印象的だった。
- 食品ロスへの関心が高まった。
- 食品のサイクル化に興味があった。
- 特に事業者や若者の取組や意見を聞くことができた。
- とても有意義だった。

* ご参加いただいた皆様、ご協力いただいた皆様に心より感謝いたします。

(事務局：星野)

Ⅱ 令和7年度環境研修会

令和7年10月23日（木）に熊谷付近の環境関連施設を中心に開催した令和7年度環境研修会について、研修会の企画と案内役を担われた角江さんによるレポートです。

熊谷から都市化について思う

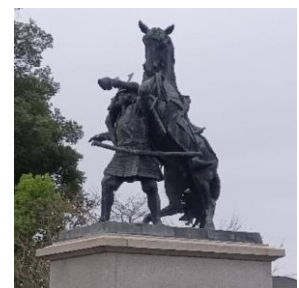
角江 紘一

歴史のある「熊谷市」を訪問し、「气象台」「片倉シルク記念館」、古の公園「星溪園」、検討中の「グリーンスローモビリティ」などを見学し、「都市化」について考えてみました。そして、熊谷市近辺の「水源」ともなっている「六堰頭首工」、また、六堰のほんの近くに、源平合戦で活躍された「畠山重忠公」の馬を背負う像があり、これも見学しました。



荒川と熊谷エリア（六堰頭首工からの配水経路）

熊谷は、明治時代には、主として農業、養蚕業が盛んでした。鉄道も敷設され、多くの先人達の努力も得て生糸などの生産も進み、工業都市化していきます。それから100年を超えた2018年、国内観測史上最高の気温41.1℃を計測し、一昨年まで、7年に亘り記録を保持していました。



畠山重忠公銅像

熊谷地方气象台

気温41.1℃を計測したところです。その他、風速、湿度、雨量など多くの項目を計測の上、天気予報を発信しています。

气象台は、本来、県に一つ、県庁所在地に置くようになっているようです。ところが、それでは東京の气象台本所にあまりに近いので、設置当時、盛んだった養蚕業の中心地でもある熊谷に置くことが決まったということです。熊谷は大都市と位置づけられていたのですね。

種々の計測器について説明をいただきました。



气象台の計測器群

片倉シルク記念館

明治時代、片倉工業が絹糸生産を行い、富岡製糸場との協業もあり、昭和後期まで100年以上に及び生糸生産拠点でありました。以後、生糸需要の衰退により工場は閉鎖され、現在、片倉シルク記念館として、この地の生糸生産の歴史を物語っています。

これを支えたのは、地域の住民・・・蚕の育成、餌となる桑の栽培、繭を育て納品、そして絹糸工場。これで社会は生きていたのですね。

当協会も出展させていただいている、熊谷市主催の「くまがやエコライフフェア」は、市内の八木橋百貨店で開催されており。この「百貨店」は、絹の織物をも扱う「八木橋呉服店」として発足したのです。



桑畑



蔵出しの様子



設備

星溪園

明治初期、数々の偉業を成した竹井澹如の別邸として造られ、昭和中期に熊谷市に譲渡されたものです。熊谷県庁、そして前述の片倉シルク記念館、八木橋百貨店の近く、即ち、当時の繁華街にあったのですね。

今では、来場者も少なく、ひっそりと佇んでいます。時折、和楽など古風なイベントなどで活用されています。いわば、いにしえの形見です。



グリーンスローモビリティ

将来の熊谷を見据えた交通手段への検討が、熊谷市主催により公民連携で進んでいます。これは、その実証実験を行っているところです。将来、無人運転化されることでしょう。

熊谷市では、このほか、「暑いぞ熊谷」にどう対応していくか・・・について市民を交えた検討会が持たれました。「CO2の排出を抑える」検討ではなく、「どうして暑さを凌ぐか」の検討です。



六堰頭首工

荒川から取水し、農業用水として配水する設備です。このレポートの初めの図「荒川と熊谷エリア」はその配水エリアも示しています。なんと、深谷、熊谷、行田、そして鴻巣まで配水しています。六堰とは、かつての6つの堰を集約したから付けたものです。もちろん、本県では利根川からの取水もあり、各地に多くの水路を見ることができます。かつての養蚕業で、桑栽培にも貢献したことでしょう。



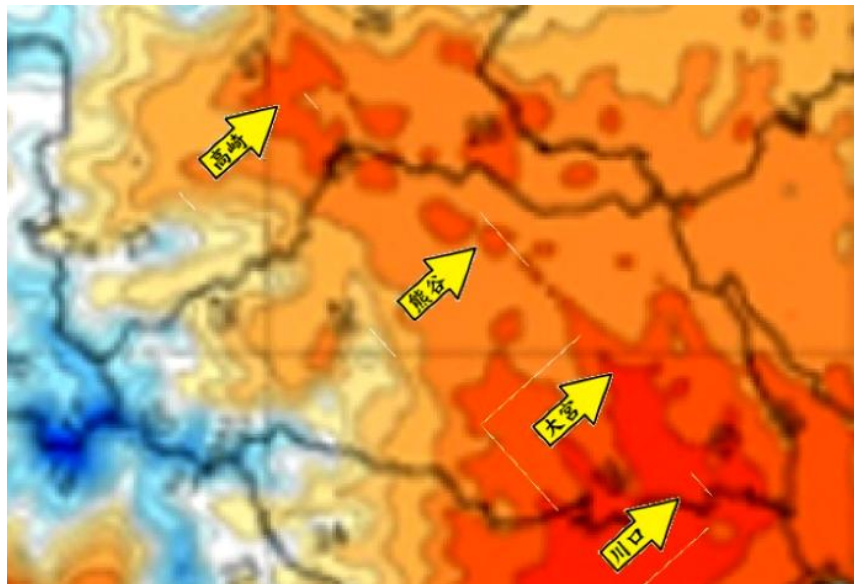
都市化について思う

街は時代と共に進化していきます。その進化を経て、ここに今があります。電車、自動車の普及、道路の整備により、活動範囲が広がる、生き生きとした海の魚が食べられるなど、おかげ様で豊かな、生活しやすい社会にあります。

しかし、その社会形成には、多くの要素があり、いいことの裏にマイナスの面があります。マイナス面には当初、意識できず、対策は後追いになります。例えば、工業化が進み、大気、騒音、化学物質汚染、廃棄物処理など公害が問題になっています。そして、一方、地球温暖化に繋がることになっています。・・・これは大変だ・・・環境保全のために「環境カウンセラー」を組織しようということとなり、我々が活動している訳ですね。

社会から排出された、主としてCO₂に都市が覆われた上に、山から吹き下ろすフェーン風、そして昼間、道路、建物に吸収された太陽熱の影響も原因になり、暑熱化が進みます。街が都市化し、道路のアスファルト化などにより、その条件にマッチするように変身してきたのです。従って、都市部が周りより暑熱化されます。これをヒートアイランド（熱の島）といいます。

ヒートアイランドが暑熱の根源です。埼玉県に於いては、東京方面から、台風のごとく移動して来るのではなく、暑熱化した街が、高崎線沿いに拡大しているということです。右図に川口、大宮、熊谷、高崎の位置を示しています。



「道路・交通環境の整備」は「重要」でしょう。しかし、俯瞰すれば、そこに街ができ、地球温暖化の根源ともなりえるのです。

とある朝のテレビでは、関東地方で10件ほどの交通事故が発生したとの放送がありました。私たちは、このニュースに驚くことなく、麻痺してきております。暑さにも麻痺しているのかも・・・社会は、身近に感じる切迫感に引かれます。

ここに「経済、経済、経済」の呼びかけに依じていけば、「生活」は豊かになりましょう。ただ、「環境」は社会的負担が増し、課題を残すことになりましょう。また、世界経済の更なる発展のために、新たな消費地としてグローバルサウスに的が置かれていますが、これは、上述の道路と同じです。世界はやがてヒートコンチネント（熱の大陸）なんて呼ばれることになるかもしれません。

私達は、このような歪を自覚し、全国に、そして全世界に、改善を呼びかけていきましょう。

Ⅲ さいたま環境フェア2025

星野 弘志

従来のさいたま市環境フォーラムは、より体験型のイベントである「さいたま環境フェア」としてリニューアルされ、令和7年10月18日(土)にさいたま新都心駅東西自由通路で開催されました。

当会は、会員の知人のグループが開発した「発電カードゲーム」の実施と従来行っている手回し発電機などによる発電体験を組み合わせたプログラムを市に提案し、承認を得て参加することになりました。

発電カードゲームは、ゲームを通して楽しく再エネを中心に発電について考えることができるものです。現在は環境団体としては解散しているNPO法人 fu〜fu〜隊の佐藤岳人さんを中心とする方々により考案されたもので、当日はそのメンバーの一人である佐々木真紀さんが参加してくれました。



さいたま市長のご挨拶

発電カード
ゲーム体験



発電体験



動物消しゴムすくい

このゲームは、その日の天気(雨・晴れ・昼・夜・風あり)の条件カードを引いて、その条件を下に、化石燃料発電/風力発電/太陽光発電/バイオマス発電の発電カードを引くごとに、ポイントが加算や減点されたりして、最終的にポイントが多い人が勝ちというものです。小学生から大人まで楽しめるゲームです。

参加者はゲームの後には、手回し発電によるLEDの省エネ効果の体感や団扇による風力発電などを体験し、最後に、今回初めて景品として導入した「動物消しゴムすくい」に興じてもらいました。100名近い皆さんにブースに訪れていただき本当にありがとうございました。

当日は、当会から星野のほか、前田さん、飯島さん、黒川さん、渡部さん、大泉さん、堀中さんが参加され、また、大熊さんから発電グッズを提供いただきました。

当日の様子は、さいたま市のホームページ(<https://www.city.saitama.lg.jp/001/009/001/p124425.html>)に動画が掲載されています。

Ⅳ 楽しかった「富士見ふるさと祭り」

前田 則義

昨年の10月25日(土)、2025 富士見ふるさと祭りが開催され、SECAも毎年展示で参加しています。会場は、富士見市市民文化会館キラリ☆ふじみです。私たちのブースは、会館一階入り口のいい場所です。展示は「自然エネルギーの体験」で、太陽光発電、風力発電キットを使用し、実際に発電出来ることを実感してもらいました。また、電気を作る仕組みを掲示し、分かりやすく説明しました。また、もう一つは、「省エネ行動トランプ」を使用し、省エネはどこでも出来ることを子どもたちに体験してもらいました。朝から雨模様で来館者が少ないのではと心配されましたが、家族連れの方も多く、一時は行列が出来るほど盛況でした。

【自然エネルギーの体験】



多くのみなさんが来られました



風力発電は、ウチワで風車を回転させます



自然エネルギーを分かりやすく説明

【省エネ行動トランプで遊ぼう】



小さい子どもご家族と参加



大人の方もチャレンジ



省エネポイントはここです

【どうぶつ消しゴムすくい】



♪体験したお子さんにプレゼント♪



当日は、中村会長が自然エネルギーキット、資料等をご準備され、会員の星野さん、飯島さん、内藤さんにご協力をいただきました。

お陰様でみなさんに喜ばれる体験会を、実施することが出来ました。

V 情報交差点

1. 新会員の御紹介

氏名：齋藤 広則 (サイトウ ヒロノリ)

登録年度 2024年度

部門 事業者

性別 男性

専門分野 廃棄物の資源循環、処理事業場への監査業務

主な活動地域 関東圏を中心になりますが、全国対応。

主な経歴

- 株式会社テスコ（在籍時、株式会社すかいらーくの関連会社）
 - ①新店建設部門10年 ②保守営繕部門10年 メンテ環境カンパニーCOO
- 東芝空調サービス株式会社（株式会社東芝の事業会社）
 - ①業務部5年 ②取締役経営企画部長兼RCM室長兼サービス統括部長5年

【現在】 齋藤環境経営士事務所 代表

- 兼 一般社団法人 Waste Management Auditors 協会 代表理事
一般社団法人アーバンベジ協会 理事
一般社団法人 Regenerative Coffee 協会 理事
合同会社みらい廃棄物研究所 代表社員 所長

特記事項

個人事業主として環境視点からの中小企業支援を行っております。また廃棄物の資源循環として「コーヒーかすのアップサイクル」に取り組んでおり①昨年末、福岡市において環境省検証事業としてバイオ炭造りを行った。②神戸市において大学生とコラボして、コーヒーかすをペイスト（CNF）化して食材としてパン造りを行った。

2. 令和8年度総会のご案内

後日、会員の皆様には郵送等でご案内いたしますが、令和8年度のSECA総会の日程等は次のとおりですので、ご都合のつく方は是非ご参加ください。

日時 令和8年5月17日（日） 14:00～16:00

場所 埼玉教育会館 303会議室

議題 令和7年度事業報告・決算報告、令和8年度事業計画・予算

その他 終了後、情報交換会を行います。

「脱炭素経済の動き ～GX法を中心に～」など



3. 会員の表彰等

当会の前会長で現在、理事をされている大熊幸雄さんが、令和7年度環境カウンセラー全国連合会会長表彰「環境保全功労者」を受賞されました。ここにご報告するとともに、大熊さんには改めてお祝いを申し上げます。



「未来を託す」（高麗川にて撮影：星野）



編集後記

圧倒的な軍事力と経済力を持ち、「世界の警察官」を自負する国がかつてありました。時に独善的になりがちなこうした行動は、国連や国際法の下で自制されたものであるうちは、世界秩序を維持するために受け入れられていたように思います。

この国は、環境分野においても気候変動など地球規模の問題に各国が協力して取り組むための様々な枠組みや国際機関に、最も多くの資金を拠出し、学術的にも政策的にもリーダーシップをとって来ました。

その後、世界は多極化が進み、その国の影響力は相対的に弱まってきたなか、かつての栄光を取り戻そうとするかのように、再び動き出しました。しかし、それはもはや警察官ではなく、国際法を無視した無法者的な行為に思えます。環境面でもパリ協定からの離脱はもとより、IPCC など関連国連組織からの脱退や資金供与の廃止が進められています。私たちの世界や環境は一体どうなってしまうのでしょうか。

しかしながら、サステナブル社会を目指す世界の大きな潮流を堰き止めることはできません。一時的に滞留はしても、各国の市民一人ひとりの環境への想いを集めた流れはやがて堰を越流し、再び大きなうねりを引き起こすことでしょう。

昨今流れるニュースを見るたびに、そんな願いを抱きつつ、環境 NPO などの足元からの活動を日々細々と進めています。（星野）

